大輪の花を咲かせるバリトン、アルベルト・ガザーレ

2011/2/1付 | 日本経済新聞　電子版

「日本のお客様は、僕がまだヒヨコのころから見守ってくださった。今、バリトン40代の最円熟期の声をお聴かせすることができて、本当にうれしい」。イタリア人男性、しかも灼熱（しゃくねつ）の島サルデーニャ出身の割には物静かでハンサムなオペラ歌手、アルベルト・ガザーレ（43）は日本のオペラファンと深いきずなで結ばれている。最初にインタビューしたのは2000年。30代に入ったばかりのガザーレは、ヴェルディ没後100年（2001年）に先立つミラノ・スカラ座日本公演で、「リゴレット」の題名役を歌うはずだったレナート・ブルソンが指揮者リッカルド・ムーティと決裂して降板したため、大抜てきされた。

「期待の大型新人、初来日！」といった見出しを思い浮かべ取材に臨んだのだが、「実はヴェローナ音楽院に在学中だった20代はじめ、日本の音楽大学との交流演奏会に出演するために1度、来たことがある」と打ち明けられた。リゴレット役でのガザーレは、当然ながら「侯爵のお抱え道化師」と「苦悩する父親」の二面性を表現するには若過ぎた半面、イタリア伝統のベルカント唱法の基本を守り、ヴェルディの旋律と台本の言葉を純度高く再現しようと、自らを厳しく律する姿勢に好感を覚えた。

2010年11月の新国立劇場「アンドレア・シェニエ」(ジョルダーノ作曲)再演で、ジェラール役を熱演したガザーレ(撮影=三枝近志、提供=新国立劇場)

スカラ座の芸術監督を長く務めたムーティによれば、「ヴェルディを歌う際、プッチーニ以降のヴェリズモ（写実主義）歌劇のように声を張り上げ、叫ぶように歌うのは大間違い。ヴェルディはドニゼッティ、ベッリーニ、ロッシーニ以来のベルカントの最終到達点であって、ヴェリズモの起点ではない」という。1990年代以降、ロシアや東欧、北欧から大声量の歌手がイタリア、ドイツの歌劇場にも進出し、言葉のニュアンスよりパワーで客席を圧倒する傾向が強まる中、ムーティは伝統の崩壊に危機意識を持っていた。

ガザーレがヴェローナで出会い今も教えを受けるテノール、カルロ・ベルゴンツィ（86）は1940～80年代に「ベルカントのヴェルディ」を体現した大歌手。ガザーレは「先生にイタリアの良いテクニックの基礎をたたき込まれた結果、先を急ぐことも、喉を傷めることもなく、声の力や色を一歩ずつ、年齢とともに広げ、深めることができた」と感謝する。ブルソンや、昨年秋に68歳の日本公演でも聴衆を圧倒したレオ・ヌッチらガザーレの先輩に当たるイタリアの大バリトンたちも「30歳のときは合唱団の一員だったか、ドニゼッティのテノール役に近いような軽い声だった」という。ガザーレは2000年代を通じ藤原歌劇団、スカラ座と2度にわたる「マクベス」、ボローニャ歌劇場の「イル・トロヴァトーレ」などで一貫して日本の舞台に立ち、「ヴェルディ・バリトン」の地位を固めてきた。

今までに「ベルカントからヴェリズモの68役を歌った」と振り返るガザーレ。日本でも昨年の新国立劇場「アンドレア・シェニエ」（ジョルダーノ作曲）でヴェリズモ、今年のボローニャ歌劇場日本公演「清教徒」（ベッリーニ作曲）でベルカントと、両極の音楽に挑んでいる。今後は「悪役とかドイツ歌劇とか、さらに幅を広げる」と意欲的だ。「そうやって一段ずつ、ドラマチック・バリトンへの高みへ近づいていく」と、どこまでも穏やかな語りくちながら11年前には感じられなかった自信、手応えもにじませて、ますます好感の持てる芸術家へと、熟しつつある。

（編集委員　池田卓夫）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.